

上演 1 1 2026年8月1日(土) 1校目 関東ブロック(長野県) 長野県松本美須ヶ丘高等学校 『親愛なるキティ 『The Diary of a Young Girl』より』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 久留米大学附設高等学校(福岡県) 明石 芽依
--	---

2025年に生きる女子高生が、自分がキティとしてアンネと会話しているように「アンネの日記」を読んでいく。性別や年頃も同じだが、生きた時代が違うだけ。日々のちょっとした出来事や家族のこと、それに加えて恋の悩みや将来への期待と不安をアンネは日記に記した。そんな決して交わることのない2人が日記を通じて心を通わせる物語だった。

キティ(女子高生)は演劇部に所属している。なかなか集まらない部員、進まない脚本。様々な不安を抱えながら、アンネに影響され日記をつけることにした。しかしアンネのポジティブな文章とは逆に、弱音や愚痴ばかりになってしまう。

舞台は上手と下手に椅子が一つずつあり、それぞれに絞った照明がついていた。それによって、まるで夢のような2人だけの優しい世界が、そこに顕在していた。また、舞台中央には象徴的な扉があり、その扉を開けて出ていったが最後、アンネはその暗闇の中に消えていった。あたかもその先に待つ過酷な運命を表現しているように見え、彼女の悲しい結末を知っている私たちは悲壮感に苛まれた。

特に印象に残ったシーンは、日記を2人で読んでいの中で、アンネがグリーンピースの皮を剥き続ける労働について記した場面だ。私たちには、それが永遠のように続き、逃れられない運命のようにも見えた。グリーンピースからピース(平和)を連想し、「ピースはいつ来るのか」と訴えるアンネの必死な姿に胸が痛んだ。

講評委員の中で、キティがアンネのような日記を書けなかったことについて二つの意見があった。一つは平和な世界に生きる私たちには理解することできない深い悲しみをアンネが持っていたからだという意見で、もう一つは少女が日記を書くときに、辛い時期はネガティブな内容を書いてしまうのは当たり前で、それをポジティブに描いたアンネは特別だったという意見だ。アンネは、私たちとは生きた時代も国も環境も何もかもが違う。でも、彼女も私たちと同じように思春期を生きていた一人の普通の女の子だ。うまくいかないことに悩み、日常の小さな幸せに一喜一憂する姿は、私たちと何も変わらない。しかしどうしてアンネはこうも強くあることができたのか？それはやはり“戦争”の存在が日常にあったからだろう。戦争は一人の少女を、現代の私たちには真似しようにもできない精神状態に変えてしまった。戦争の恐ろしさを感じ、それは二度と起きてはならないものだとは再認識した。

平和な世界に生きる私たちとアンネを重ねて見ることによって、好きなことができ、女の子が楽しんで生きることができる、という世界をアンネが望んでいたことを痛感した。彼女の望む世界には戦争はない。



今一度戦争の惨さを認識し、戦争のない今よりも楽しく生きていける世界を作らなければならないと強く感じた劇だった。